

飴
買
い
幽
霊
・
後
日
談



いまからちょうど一年前、我ら獅子四体が南門を司る、この福善寺で赤子が産まれた。しかし普通に産まれた赤子であれば、こうして語りはしない。何を隠そうこの赤子、墓で産まれたのだ。ある夜、丹花の小路にある飴屋の親父が門をくぐってやって来た。親父はしばらく境内を歩き回り、それから大声で和尚を呼んだ。「……この前から女が毎晩飴を買いに来とった。

毎晩つちゅうのが気になってな、こうして後を付けて来た。その門をくぐるのははっきり見た。それからどこに行ったかと女を捜したが見当たらん。代わりに墓から赤子の声がする。和尚さん見てくれんか」

親父が言う通り、先日葬られた女の墓から赤子の声がした。もしかしたらと二人が墓を掘り返すと、元気な赤子が出てきたのだ。

和尚は「この墓は、先日ここに葬られた女の墓じゃ。産月が近かったけえ赤子は無事に産まれたんじゃ。それで母親が幽霊になって、お前さんとこの飴をやって育てとったんじゃろう」とか言うておったか。そう聞いて親父は落ち着いたようだった。赤子をあやしながら、

「うちには子どもがおらん。これも何かの縁じゃろう。な、和尚さん。わしにこの子を引き取らせてくれんかの」

ところが、飴屋に引き取られた赤子が毎晩のように夜泣きをするようになった。

静かな尾道の夜に泣き声はよく響く。我らは丹花小路のあたりを眺めながら顔を見合わせた。

「泣いとる」

「泣いとるな」

「母を恋しがつておるんじやろう」

「泣くのはええが、ここまで大声では」

話していると、正門の龍神さまがぬつと現れて、こう仰せられた。

「お前たち、あの赤子をあやしてこい。お前たちの姿はこう……もふもふとしとるではないか。赤子はそういうのが好きじやろう」

そんなの親父と女房がやるでしょう、さすがにそれは、我らは門に構えて寺をお護りせねば、獅子には威厳というものが……。

「やかましい。さあ行け」ということで、赤子を泣き止ませに行くように

かれこれ一年間あやしてきたある日、赤子がひととき大きな声で泣いた。

「あの赤子も二歳になるといかに」

「向島まで聞こえておるのではないか」

「このままでは尾道中起きてしまう」

「すぐに行くぞ」

門を離れて、空を駆ける。飴屋めがけて一直線。着いてみると、思いもよらぬ光景が。

「なんで龍神さまがここに」

いつもの部屋に龍神さまがいらつしやる。しかも加持祈禱の道具やら舞の道具やらで賑やかな出で立ちである。

「どうしてそんな大荷物を……」

「あっ！ これ護摩の木札じゃないですか！

千光寺さんから持って来たんですか」

「警策……天寧寺さんのですか」

「借りてきた」ふふん、と胸を張っている。

「いろいろ混ざつとると思つたら……」



なつた。行くとなつたいてい飴屋の親父か女房が飴をやつてあやしている。

初めはどうやつてあやそうかと戸惑つたが、猫の真似をするということに決まつた。そこらによくいる猫が人間に触れるさまを思い出し、前足やしつぽ、頭で触れたり、可愛らしく毛づくろいをして見せたりする。これのおかげかはよくわからないが、いろいろやつているうちに赤子は泣き止むのだ。

「二歳になるこ奴を祝つてやろうと思つてだな」龍神さまが御幣をばざりと一振りすると、赤子はいつそう声を上げて泣いた。

「怖がられて祝うどころではないようですが」

「うむ……」

祝いの道具を抱えた龍神さまが小さくなる。その間も泣き声は続く。産まれてから一年経ち、多少動けるようになってる赤子は、布団を引つべがし、枕を投げ、殴るような動きをする。龍神さまに向かつて。どうやら、顔が怖い龍神さまを鬼か何かと勘違いして、退治しようとしているらしい。

「早く寝かしつけねば」

まずは、顔が怖い龍神さまに帰つていただくこう。

「龍神さま、わかつておられると思いますか」

「うむ……」

顔が怖いというのを気にしているらしい。しゅるりとおとなしくお帰りになった。

それから、とにかくこちらに気を向けさせるため四体で赤子にじゃれつく。するとそこに、飴を持った親父が入ってきた。いないと思えば、飴を取りに行っておったか。

「よおしよし。そら、お前の大好きな飴だぞう」

親父は慣れた手つきで赤子に飴を差し出す。口まで持っていくが、なかなか入らない。口回りがべとべとだ。うまく舐められなくて悲しいのか、またぐずりだす赤子。全く、仕方のない奴らめ。

赤子に頭を擦りつけたり涙を舐めとってやりたり、とにかくいろんなことをした。飴まみれになりながら、いつもより長い夜泣きに付き合っている。努力の甲斐あって、赤子はようやく機嫌を良くし、にこにここと笑うまでになった。そんな赤子を見てみんな安心していた。

「このままではまずい」と、赤子に頼ずりざれている一体が言った。「朝が来てしまう」

「そうだ」

い」と声が聞こえる。

「ありがとうございます！」

龍神さまの救いを受けた俺たちは、雲の隙間から射しこむ太陽の手を避けながら空を駆け、やつとこき門の手前まで来た。

「間に合ったな。本当に危なかったが」

「では、いつもの場所へ」

そして昼間の定位置、門の四隅に飛び乗った。その瞬間太陽が姿を現し、身動きが取れなくなった。待ってくれ。まだ後ろ足が宙に浮いたままなのだ。

しかし、一度昇った太陽は夜まで沈まない。今日一日はこのままだ。一日だけ人に見られなければ良いのだ、頼む。

俺たちの祈りも虚しく、朝早くからお参りに来た男がいた。その顔が俺たちの方を向いて逸れない。首を傾げ傾げ、とうとう和尚のところへ言いに行った。

「随分長居してしまった」

にわかには焦りが広がる。日光を浴びると動けなくなってしまう。その前に何とか帰らねば。

「さあ、急ぐぞ」

赤子の腕の中にいた一体が身をねじって脱する。赤子は何かを察しているのか、寂し気な顔をしたものの、素直に見送ってくれた。

家を出ると、東はもう白み始めていた。

「間に合うか」

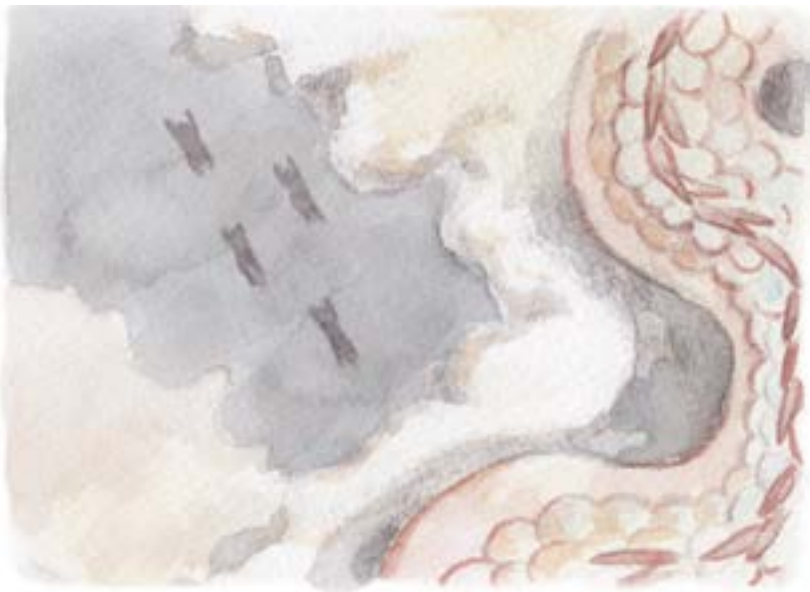
「いいから急ぐぞ」

木々の枝先が足先を掠める。時間があれば体中にこびりついた飴をどこかで拭いただろうが、そんな暇はない。とにかく今は門に帰ることだけだ。

門まであと半分というところで、ついに太陽が見えてきた。ここまでか、と諦めかけたその時、東の空に暗雲が立ち込めた。

「龍神さま！」

「わしが雲をかけてやる。今のうちに戻って来



「和尚さん、この獅子たちの格好が前と違うように思います」

「いや、いつもと同じ格好だがね」

えっ。

「はあ。……左様ですか」

男は尚不思議そうにしていたが、そのまま本堂の方へ行った。和尚は内心困惑でいつぱいの我らを見ながら、

「それにしても妙な格好をしている。天から降りて来たばかりのようだ」

にやりと笑って、本堂へ戻って行った。

かくしてこの「妙な格好」で覚えられてしまったので、赤子をあやした帰りの格好のまま居ることになったのだ。ちなみに、全身の飴はまだ拭えていない。■